

第11話 江戸と浪速とでは常識も考え方も水と油の大違い

江戸も大坂も幕府直轄の天領ですが、江戸には旗本八万騎など武士階級が人口の 50%も占めていて、武士の生活を維持するために集められたのが江戸町人です。大坂も豊臣秀吉に集められたのですが大坂の役で徳川に滅ぼされてしまい、武士階級は人口の 1%以下に激減。幕府権力と直接結びつかないと商売にならない江戸に比べて、権力者、武士に奉仕する神経などすっかり消えて反権力思想がめばえ、常識や考え方が違う文化に育っていきました。

どちらに軍配をあげるかなんてよりも、間違いなく根っこが違います。日本人は団体行動、組織力、秩序ただし一糸乱れぬ動きが得意ですが、これは軍隊に欠かせない特質で、軍人＝武士＝江戸につながって、私情をはさまず組織を重んじ他人をだしぬかない「サムライの美德」が染みこんでいったのでしょう。現代でも地下鉄乗車にきれいに並んで待つのが東京で、団子状態が大坂。東京で列に割り込むと秩序を乱したと喧嘩ですが、大坂は「かなわんなー」とオバチャンの横暴を許してしまう。

ウナギの蒲焼も大坂風は腹割きですが、武士が嫌がるから江戸では背を割き、浮世絵の美人も江戸は武士好みの色白瓜実顔で浪速は丸顔さくら色。権力が威張る江戸ですから歩行者妨害の車（強者＝権力）の検挙は東京が日本一で、歩行者（弱者）が信号を守らないのが大坂。

財務省の〇口ちゃん、農水省の△◎ちゃんとも親しげに、TVで顔を見ただけでも言い放つのが東京流で、政治資金パーティの広い会場の隅っこで演説を聴いていただけても「民主党の小沢ちゃん」や「自民党の小泉ちゃん」と「いっしょに飯を食った」というのが東京で、そう言うのを見栄っ張りだと笑うのが大坂。

関西人は商人道がいまでも好きで、「あいつは商売人だよ」はビジネスにたけた人物へのほめ言葉ですが、東京では軽蔑、蔑^{さげすみ}みの言葉。秩序を重んじる東京と、抜け駆けでも商才だと認める大坂とではデリバティブ取引に対する感覚も違うのが当然で、公定価格ではないセリ（競争売買）は秩序を乱すから自由市場は江戸では排除されてきました。やっと認めても現物株は東京証券取引所が一番で、株の先物取引は大坂証券取引所がトップ。ETF（上場投資信託）もオプション取引も大坂。ユビキタスの世ですが、堂島米会所の伝統という場所の力（POWER OF PLACE）が生きているのだ、と思ったりしますがいかがでしょうか。

第12話 江戸っ子だってねえ、チャキチャキの神田の生まれよ！

神田に生まれて玉川の上水を産湯につかい、曾祖父母から3代つづいて江戸に住んではじめて江戸っ子といえるのです。江戸時代中甸までは家康とともに武蔵野平野を開拓した少数の人たちしか該当しませんから値打ちがありました。もっと値打ちがあるのが京都で、平安時代からの家系図があるのが都人なのでから例外として、大阪モンになるのは簡単です。3日も府下に住み「阪神タイガース」(オリックスも忘れないで)のファンになるとそれでOK、立派な浪速っ子の誕生です。

秀吉さんのビジネス感覚も商人風でしたから、淀屋をはじめ地方の力がある人達が天下の台所を形成してきました。武士が商売の対象ではありませんから、地方の田舎や遠国の客衆を大切に接待にもつとめました。ですからヨソ者を排除するどころか大事にする伝統をもっているのです。例えば、商売人の本尊である大阪商工会議所の会頭だって、初代の五代友厚(米会所の再開、証券取引所の創設、大阪市立大学創設など)は薩摩・鹿児島出身ですし、2代目の藤田伝三郎(藤田観光、阪堺電車、各商品取引所設立に関与)は長州は山口の出身、3代と5代でやっと大阪の田中市兵衛さんになりますが、それもつかの間。4代目は堂島米会所の頭取だった山口県せきはじめの磯野小右衛門(大阪株式取引所理事長)、6代目は奈良の浮田桂造、7代目は愛媛の土居道夫、8代目は石川の山岡順太郎、9代目は愛媛の今西林三郎(大阪三品取引所)、10代目は京都の稲畑勝太郎と、24代もつづいてきた会頭のなかで大阪出身はたったの4人しかいないのです。

飛行機の滑走路をつくるつもりか、などと言われながらも御堂筋を建設し、日本一の「大大阪」をつくりあげたのは前大阪市長の関(関)淳一さんのお祖父さんの「せきはじめ関一さん」です。この人も生まれは静岡県伊豆で、1893年に一橋大学を卒業して大蔵省勤務のあと高等学校の教諭や校長などを歴任、社会政策論や都市計画論の専門家になって「シティプランニング」という外来語に「都市計画」という訳をあてて、最初に用語として使ったエライ人です。

1923年に第7代大阪市長になり御堂筋を拡張し、下に地下鉄御堂筋線を走らせ、大阪城天守閣を再建、市営公園や公営住宅を整備するなど明治大正の大阪をつくりあげています。1935年に天王寺の自宅で死去、中之島東洋陶磁美術館の正面に銅像が建立されましたが、他国出身の経済人となるともう数えきれません。

第 13 話 米市場など浪速の三大市場の町衆が日本一の天神祭りに

祭りは浪速の華。大阪市内には 150 社の神社があって、そのうち 99%が夏に祭りをやっています。農村地帯ですと五穀豊穡を祈る春祭りと、豊作に感謝する秋祭りが中心なのですが、都市の「お祭り」というのは 7 月 17 日の京都祇園の山鉾巡行をはじめ夏がほとんどです。大阪の夏祭りの幕開けは 6 月 30 日～7 月 2 日に綺麗どころ(昔はミナミの芸者、いまは応募者)を宝恵駕籠ほえかごに乗せて練り歩く愛染あいぜんさんで幕を開け、7 月 31 日～8 月 1 日の住吉大社の夏越祓なごしのはらえの神事が締めくくりになりますが、その間の 7 月 25 日の天神祭を加えて、浪速三大祭りと呼んでいます。

天神祭は、江戸の神田祭、京都祇園祭とならぶ日本三大祭りといわれますが、浪速商人独特のどんな困難でも前向きにとりくむ発想が祭りを盛りあげてきました。天神さんは日本古来の土着宗教の神道の一つで、祭神は菅原道真すがわらのみちざね(845～903 年)さんです。道真さんは藤原時平による宮廷クーデターに遭った悲劇の主人公で、右大臣から九州・大宰府の権師ごんのそつという地位に左遷されてしまいます。2 年後、復帰もかなわず「恨めしや～」と髪ふりみだし天を仰ぎながら亡くなってしまい、朝廷に天罰がくだったのです。皇太子の保明親王が 21 歳で死去、そのあとの皇太子慶頼王も死去。落雷で大納言即死、そのショックで醍醐天皇が病気になるって朱雀天皇に譲位のあと、死亡。

これは道真の怨霊に違いない。タタリじゃ天罰じゃ「あな恐ろしや」と、いそいで官位を元の右大臣に戻し左遷を取り消しましたが、遅すぎました。災いがおさまらないので延喜 5 年(905)に大宰府天満宮を造って霊を慰め、天曆年間(947～956)には京都北野に怨霊を鎮めるための北野天満宮を建てます。

大阪の天満宮も、村上天皇の勅願で天曆 3 年(949)に造られたもので、道真さんが九州太宰府へ旅立ったのが川沿いのここ、そのあとに 7 本の松がニョキニョキ生えて梢が黄金色にキラキラと輝いたといので、この地に社殿を建てたのです。ともかく世にも恐ろしき怨霊神おんりょうまつが祀られたのですから気色が悪い。町衆も最初のうちは遠巻きにしていただけでしたが、ここがなんとも上方町人らしいのです。

恨む相手は京都のお公家だからわれら下々しもじもには無関係。それなら折角の立派な神社がもったいない。浪速のイチビリ精神が沸いてきて、道真さんを「怨霊の鬼」から書道や詩歌など学問の「神様」にまつり上げてしまった。氏子代表は米市、青物市、魚市の三大市場の連中だったので賑やかで華やかになったのは言うまでもありません。

第14話 天神祭りの踊りは米市場のセリ売買を現しているって？

大坂天満宮は、公家社会を恨んで死んだ菅原道真の恐ろしい怨霊を鎮めるために建立されたはずですが、町衆が学問の神様に持ち上げてしまった。商都大坂では読み書き算盤は必須科目。教育ママを意識した寺子屋は競って天神さんの掛け軸をかけ、綱敷天神、お初天神(露天神)、福島天神など順次建てられていく。怨霊を鎮めるなんて目的はどこかに消えてしまい(神社本庁殿、自由な解釈にお慈悲を)、天神社、天満宮、菅原神社など全国で1万259社という拡がりをみせたのです。

さて、祭りの中身ですが、元々が道真さんの御霊を慰める神事ですからオゴソカなものだったのですが、大坂町人の手にかかると楽しい庶民のお祭りになってしまいます。船場の商人は日頃から武士階級の目を意識して、目立たないように地味な暮らしを心がけ、無駄や無理は避けてケチに徹しましたが、お祭りの日だけは無礼講です。身分の上下に関係なく財力を誇示することもOK、自分の力を見せることができる唯一の「晴れ舞台」になっていきました。

堂島や中之島の蔵屋敷では天を焼けこがすようなかがり火が焚かれ、梅鉢印の大提灯が店頭を飾ります。江戸時代は陰暦ですから6月24日が宵宮で、堂島川にかかる銚子橋のところで銚子を流し、着いた下流の松島にあったお旅所まで水上パレードするのが祭りのハイライト「船渡御」です。天満宮から流れ着くところまでが神域でしたから、お隣の天満青物市場、近くの堂島(淀屋)米市はもとより、下流の雑喉場魚市という三大市場すべてが氏子だったのです。ただ現代は、地盤沈下と水位のせいで橋の下を神輿の船がくぐれないのでコースを変更。水は風次第で上流に流れることもあるという、ものすごい屁理屈で天神橋から川上に遡っています。いかにもナニワでしょ。

25日に大川で繰り広げられるのが船渡御、つまり水上パレードです。お金持ちは船を借り切って綺麗どころを引き連れ、三味や太鼓とともに乗り込む。庶民はそういう船を見て、どこそこの船は大きかったとか華やかだったとか囁し立てます。大坂人はサクセスストーリーが大好きで他人の成功を妬んだりしませんから、競いあってますます盛り上がっていく。

天神祭りには市場の地車も参加しましたが、法被姿のお兄さんが「両手をあげて」ゆらゆら身体をくねらせて踊る独特の姿は、市場の「セリ売買」を現したものです。青物市場のものだというのが定説ですが、青物も魚類のセリも片手だけで値段を示すもの。価格と数量の双方を両の手で示すのはザラバ取引の米市しかない。と、思うのですがいかがでしょうか。

第 15 話 信用を大事にした大坂だからこそ、江戸にはない米手形、米切手が登場

江戸時代の年貢は主に米納でしたから、各地の大名たちは大坂におコメを廻送して藩財政にあてていました。水の都の川沿いには諸国の蔵屋敷が薨を並べ、搬入されたおコメは米商人を町人蔵元に、代金の収納と送金は両替商を掛屋として依頼します。販売は入札制で落札すると手付金を掛屋に支払い米手形を受け取り、残金をそえて蔵屋敷に持参して米切手にする。現代の倉荷証券のようなものですから必要なときに蔵屋敷に持参すると蔵米が受け取れます。市中での取引も重く嵩張る米俵ではなく、便利な米切手ですますますようになってきました。

米切手は仙花紙（^{せんかし こうぞ} 楮製の和紙の2枚合せ）で、縦1尺2〜3分（約40cm）、横4寸5〜6分（約19cm）ほどで、券面には俵数が書かれています。20俵、25俵、30俵とさまざまですがいずれも証券1枚は10石（1500kg）です。藩により運搬方法の違いが俵に大小の違いになったからで、20俵の場合の1俵は75kg、25俵は60kg、30俵は50kgになっていました。

米切手の文章は「右、あい渡す也」といった威張ったものから、保管期限を越えたら反古にするとか、火災の場合は藩が責任を持つとか、細かく注意書きのあるものなど多種多様。最後に蔵屋敷の名前が特異な文字で書かれていて、数種類の印影とともに贋造防止が目的です。米切手は質入れや融資の担保になり、保管中の目減りや減量も蔵側の負担でした。証券の持ち主だった商人が万一財産没収になったとしても米切手だけが家族に残されるならわしでしたから、富豪層は出米（蔵出し）せずに投資目的の財産として持つことも増えていきます。

蔵屋敷は蔵内にある数量だけ米切手を発行しますが、客は証券のままで売買し、倉庫代金は無料ですからすぐには受取りにこない。そこで財政に困窮している藩は、まだ国元にあるコメや運送中のもの、ひどい場合はまったく無いものまで切手にして資金調達する藩も現れます。なにしろ支払い金利のない金なのです。

空米切手とか未着米坊主手形、調達切手などと陰口されるものがそうした米切手で、江戸では幕末まで米切手が登場しないのは現物以外の紙に書かれたコメなど信用しないためでした。大坂でも不渡り事件がありましたが、団結して以後は大坂での流通を止めたのですから、さあ大変。藩財政がパンクしますから急いで解決しました。たとえ紙切れでも、大坂は信用という付加価値を自分たちで育成したのですね。

第 16 話 淀屋五代物語。文禄堤の工事を請け負い加賀百万石のコメも扱う

日本一の米問屋「淀屋」の出身は山城の国・城州淀、現代の京都府八幡市西北の淀です。初代の岡本与三郎常安^{じょうあん}は(第 2 話参照)豊臣秀吉に取り入り、文禄4年(1595)に淀川が台風で氾濫したとき特に難工事の枚方から橋本までの堤防工事を引き請けて完成させます。これが文禄堤で、京阪電鉄守口駅の北側の高架状の本町通りがその名残で、堤の上は京街道として交通の要所になりました。秀吉はこの功績に金銀を与え「商いすべて勝手たるべし」とお墨付きを渡し、加賀百万石のコメ10万石の販売権をもって大坂北浜に進出するのです。

その後、大坂の役では家康軍について廃墟同然になった大坂の再建のために尽力し、当時は砂地の中州にすぎなかった中之島を開発。淀屋橋、常安橋などに名を残します。跡を継いだ三郎右衛門言当^{げんとう}、通称个庵^{こあん}もまた大阪を天下の台所に作り上げたといわれる傑物で、「天満青物市場」^{うつぽ}「靱^きの開拓」「雑喉場魚市」^{ざごば}「糸割賦の獲得」「淀屋米市」を隆盛させました。

ところが跡継ぎに恵まれません。一人娘の富士(のちに妙恵^{みょうけい}と改名)に養子を貰い、それが三代目当主の三郎右衛門箇斎^{かさい}。その箇斎も5年後に永眠し、数え年でまだ14歳の三郎右衛門重当^{じゅうとう}が四代目になります。二代目个庵のビジネスを見ながら育った妙恵は、若い四代目を支えて獅子奮迅で淀屋米市を益々繁盛させますが、反面、米本位制の幕府経済のなかで米価を町人風情が自由にしている。米価高騰は米商人の金儲け主義が要因だと決めつけて、淀屋は幕府から狙われることになりました。

追い詰められた妙恵は、幕閣の圧力を避けるため重当に旗本五千石米津出羽守田盛^{よねきつでわのかみただもり}の末娘を嫁に迎えました。田盛は後に一万石が加増されて大名に列せられたため、淀屋は譜代の大名と姻戚関係ができたのです。このお姫様も十年目に亡くなり妙恵は守りに入りました。蔵元の仕事は他人に譲り、町年寄など要職にあった重当はすべての職を辞任し、酒に遊びと、わざとらしい放蕩三昧を繰り返して馬鹿に徹します。

元禄10年(1697)4月、淀屋を背負い続けた重当が亡くなり、残った妙恵の孫、十五歳の辰五郎が淀屋五代目当主岡本三郎右衛門広当^{こうとう}になります。その暮れには狙い撃ちされていた淀屋米市を堂島新地に移転させて「堂島米市」にしてしまいます。現在の全日空ホテル(ANA)のところで、幕府が堂島米会所を公許する33年前のことでした。次回は淀屋がついに財産没収でアウトになるお話をしましう。

第 17 話 コメの価格の標準をたてたいと徳川家康に直訴して朱印状を

日本一の豪商「淀屋」の二代目^{こあん}个庵の一人娘^{みょうけい}「妙恵」は、息子の四代目重当の後ろ楯になって自由市場「淀屋米市」を隆盛させますが、コメ本位制の幕府にとって面白くはありません。なにかにつけて圧力を強めていました。

元禄 10 年(1697)、子どもの四代目が亡くなると残ったのは孫の 15 歳になったばかりの辰五郎でした。妙恵は五代目^{こうとう}当主三郎右衛門広当と名乗らせ、狙い撃ちされていた淀屋米市を堂島に移転させて「堂島米市」にしてしまいます。場所は元禄元年に造成された北新地で、現在のANAクラウンプラザホテル(旧名・全日空ホテル)のところです。

だが、鬼女の妙恵も年齢には勝てません。元禄 15 年(1703)12 月、赤穂浪士が吉良邸に討ち入った直後に 88 歳で亡くなったのです。その 2 年後の宝永 2 年(1705)5 月、まだ 19 歳の若い五代目が夏座敷の天井にビードロ(ガラス)を張って錦鯉を泳がすなど、あまりに生活が贅沢で派手だという理由で全財産没収、大坂三郷所払いになってしまいました。本当の理由は米価という行政の根幹を危うくすると思ったから潰したのでしょうか、歴史から抹殺されているだけに真相はいまも藪のなかです。

世間は黙っておらず、その年に「傾城^{けいせい}金^{こがね}淀^{よど}鯉^{こい}」や「文殊開帳」などの歌舞伎の材料にとりあげ、宝永 5 年には近松門左衛門が「淀鯉^{しゅっせ}出世^{のたきのぼり} 滝^{たき} 徳^{のぼり}」を発表しますが、当時は幕府への批判がましい芝居はただちに上演禁止でしたから、いずれも辰五郎(広当)の女狂が筋書きという、公儀の思惑どおりの筋書きですから情けない。ただ、没収された財産のなかに大名への貸付金の額が銀 1 億貫目、金で 16 億 6 千両、100 兆円という現代の国家予算よりも多い莫大な額でしたから、借金を帳消しにする徳政令だったと解釈する人も多いようです。

本当は幕府が発表する公定価格(御張紙相場)の維持を逆^{さかなで}撫したのが許せなかったのですから、自由市場などさっさと^{けっしょ}闕所にすればよかったのですが、手がだせませんでした。実は、初代の常安が大坂の陣で東軍を応援した功績で、「大坂に集まる米相場の標準を建てたい」と徳川家康に願い出て米市を独占的に許されていたからです。そこで四代目の重当を呼び出して正米市場(先物取引は禁止)の新しい朱印状与えるという姑息な手段をとりました。それでも神君家康公のご威光には勝てません。すべて没収したはずの財産も、家康が与えた淀の田畑だけは 7 年もたって五代目の辰五郎に返還されているのです。

第 18 話 手品のように、危険を「つめかえし」にする金融テクニクがあった

江戸時代の米商人たちの最大の悩みは米価の変動でした。平成 15 年(2003)の凶作騒動では行政指導も力及ばず倍にまで値をとばし、翌年には半額以下に暴落してしまったことは記憶に新しいところですが、江戸時代の値動きはそんな生易しいものではありません。いずれにしろ仕入れをする前に値段が高くなると損ですし、安く仕入れたと思っていても、値段がドンドン下がると、それだけ損もドンドン増えていくことになります。そうした不安を、上方商人たちは淀屋米市を利用して解消する方法を考えだしました。それが「つめかえし」と呼ばれた掛つなぎのテクノロジーです。

加嶋屋さんの倉庫にはおコメがたっぷり詰まっていました。仕入れ値は1万9千円で市中価格は2万円、1俵あたり1千円の利益になります。ところが九州地方から大豊作だというインサイダー情報が飛び込んできたのです。さあ大変、このままだと大量の在庫を抱えたまま暴落をむかえることになり、下手をすると倒産しかねません。そこで、両替商(遣繰^{やりくり}両替)を訪ねて米切手を借り、その米切手をまだ下がっていない市場価格の2万円で売っておくのです。

しばらくして恐れていた心配が的中しました。米価は暴落して半額の1万円になってしまったのです。その頃になって、山積みになっていた倉庫のおコメも市中価格の1万円でやっと売れました。当然ですが1万円(販売価格)－1万9千円(仕入価格)＝9千円の大損です。でもあきらめるのはまだ早い。両替商で借りて2万円で売っていた米切手を、相場の1万円で市場から買いもどし、貸してくれた両替商に返却すればいいのです。2万円で売ったものを安い1万円で買い戻すのですから1万円の利益。倉庫の現物米は9千円の損ですから、1万円－9千円＝差し引き1千円の当初見込んだ利益がちゃんと確保できているのです。

でも世間はそう甘くはない。暴落せずに逆に3万円まで暴騰したらどうなるのか。2万円で売った米切手は3万円で買い戻さなければなりませんから1万円の損ですよね。そのかわりに倉庫のコメが3万円で売れますから、3万円(販売価格)－1万9千円(仕入価格)＝1万1千円の利益で、やはり差引くと1千円の利益が確保されていて、価格保険が見事に成立しているのです。正米のリスクを米切手をつかい「つめかえし」をしたわけで、借りてきた米切手を「売って」保険をかけたところから売り繋ぎ、現代では「売りヘッジ」といいます。

第19話 お米屋さ〜ん、保険つなぎには「買いヘッジ」もおまっせ

市場価格の下落で生じる在庫の損失を、その前に米切手を借りてきて売っておき、値下がりをしたところで買戻した利益でカバーする方法が「売りつなぎ」「売りヘッジ」でしたが、反対に「買いヘッジ」という方法もあります。

加嶋屋さんはお客さまから新潟産コシヒカリ（江戸時代はまだない銘柄ですが）の注文を受けました。ところが日本海・下関・瀬戸内海の西廻り航路で運ぶためにまだ淀屋米市に出回っていません。相場は2万円でしたから、入荷したい利益1千円を見込んだ2万1千円で売る契約をしました。1千円の収益で充分だと思ったのですが、途中で不安がでてきました。梅雨の大雨で稲が冠水し凶作になるかも知れません。平成16年のように台風が10コも連なって襲いかかるかも知れないのです。もしも、そうなってしまうと暴騰してしまい2万円で仕入れなどできっこありません。頭脳をはたらかせるのはココです。同じ値頃ですでに到着している熊本産コシヒカリの米切手を2万円で購入しておくというのがミソ。

心配は図星でした。米価は暴騰して市場価格は3万円になってしまったのです。新潟産が到着しましたが3万円で仕入れるほかなく、泣きの涙で約束どおり2万1千円で販売します。つまり2万1千円（販売価格）－3万円（仕入れ価格）＝9千円の損です。が、ここは焦らず慌てずが大切。必要ないのに2万円で買っておいた熊本産の米切手を売るのです。江戸時代、肥後（熊本）、筑前（福岡）、広島（芸州）、中国（防長）のコメは「^{しくらまい}四蔵米」といって現代の魚沼産コシヒカリのような高級銘柄でしたから3万円以上はしているはずです。そこで2万円で買っていた米切手を3万円で売って見事1万円の利益を獲得。新潟産の損が9千円でしたから差し引くと利益1千円、ちゃんと見込みどおりの収益が確保できています。

反対に、台風どころか晴天がつづいて大豊作になって^{きょうてんどうち}驚天動地。半額の1万円にまで安くなってしまったから、さあ大変。なにしろ2万円で買った熊本産の米切手は1万円で売るしかないのですから1万円の損。ところが2万1千円で売ると約束している新潟産も1万円で仕入れが可能ですから、（解約がなければ）1万1千円の利益。差し引くとあ〜ら不思議、計画どおりの1千円の儲けです。

いかがです、手品のようにしょ。暴騰しようが暴落しようが、10倍高くなろうが土塊なみに安くなろうが、「つめかえし」をしておくと最初の予定利益1千円は確保できる、これこそ浪速商人^{あきんど}のテクノロジーというものです。

第 20 話 大豆が急騰しようがガソリンが暴騰しようが、屁の河童ッ！

NHKの番組「ニッポンときめき歴史館(1999 年 11 月)」のなかで「つめかえし」を題材にした特集がありました。林家正蔵を襲名した「こぶ平さん」が進行役で、私も監修にあたりましたが、「売りつなぎ(18 話)」と「買いつなぎ(19 話)」を紹介し、江戸時代の祖先たちが発明した金融テクだという筋書きです。

担当者も理解に苦労したようで、司会の小田切千さんからは 2 回も質問責めにあいましたが、当然、現代もこの方法は有効で、米切手の代わりに先物市場が利用されています。

ガソリンや大豆がこれから高くなると思ったら、前もってたっぷり仕入れをしておくとは儲けです。が、タンクや倉庫には限界があってそうはいきません。嫌々でも高値で仕入れるリスクにさらされ、結果は他店の安値攻勢で閉店の憂き目にあわされます。これを防ぐには上昇する前に先物市場で買っておくというのです。先物は将来品物を受け取るという契約ですから、倉庫は不要であとは値段が高くなるほど儲け、100 円のガソリンが 150 円で安心、200 円なら左ウチワです。

つまり、大豆やガソリンが高くなると事前に騒ぐぐらいなら、前もって先物で買っておくとなんの心配もなく日本一安いガソリンを売ることが可能なのです。これは一種の価格ヘッジですが、問題があります。値下がりするリスクを抱えるので、基本的にはボローイング(borrowing)という手法をとっています。

先物取引は、将来の一定の年月までに反対売買(または実物を受渡し)をするため限月制げんげつせい(決済する月という意味)になっています。例えばいまは 9 月ですが、10 月に仕入れて 12 月に販売する予定があるときは、先物 10 月限に買い注文(買いヘッジ)を、12 月に売り注文(売りヘッジ)をするのです。そして実際に現物を仕入れた 10 月に先物 10 月限の買いを手仕舞します。これで仕入れ価格が 100 円から 200 円に暴騰していても先物の利益でカバーできますし、12 月に 200 円のガソリンが 100 円に安くなったとしても先物取引の売りの利益で値下がり損を防ぐこと(保険つなぎ)が可能です。穀物の場合も、エタノール化で穀物不足になると騒ぐよりも、仕入れ月の先物を買ひ、販売予定の月の先物売っておく。もちろん裁定取引や、現物と先物の数量調整など高度なテクニックも勉強のしがいがあります。

当業者にとっての先物取引とは、儲けるというより「馬鹿らしい損などしない経営」のための技術だと覚えておいてください。